

第 10 回 KOZOOM サロン 28

わが母の記 第 2 回



母のこと

中西 卓

68 年前に母は 高津へ私の卒業式に出かけたが、そこで意外なことがあった。優等生の表彰で“なかにしみねこ”と聞いたが（峯子は 2 年前に卒業したのに？）、何だか狐に出会ったように思ったらしい。鳥居（ブディ）純子さんと中西（岡）峰根子さんは京大法学部に揃って進学した才媛だったが、それを母は知る由もない。鳥居さんとは 2D で同級だったが、岡さんとは出会いがなかった。16 年前に不慮の交通事故に遭われたときの松浦さんによる追悼記と追悼紀行を HP で読み岡さんの姿を始めて知った次第である。

KOZOOM 予告編を綴るに際して神戸在住の姉（山形）峯子に電話した。清水谷から高津に移った姉と共通する話題はやはり恩師のことで、清水谷の時から中村道之助先生（おみち）は素晴らしくスマートな方だったと、教わったスコットランド民謡を今も口ずさんでいる。夏の甲子園に出たエースの F さんと同級だったと姉から聞いたことがある。

<ここからが本論>

母・西嶋シヅは明治 41 年 中河内郡藤井寺町野中に生まれて兄・弟の間の一人娘として不自由なく育ち、菅田（こんだ）裁縫女学校を優等で卒業した。ここで美術の先生（父の姉）に見込まれて堺に近い布忍村の中西家に嫁したのが人生を大きく変えた始まりである。父は 13 人兄弟の 4 番目で阿波出身の両親の後を継いで河内木綿の織布工場を経営していた。夫の両親・弟妹、女中や職工さんへの気配りに田舎出の母は普通の主婦にない苦勞をしたと思う。10 年ばかりで弟

妹が巣立ったのと、ベークライトの軍需工場になって気苦労が無くなったが、戦中・戦後の食糧難で5人の子どもを育てるのが大変な苦勞だった。ただ、姉と自分は母の実家に休みのたび逗留して空腹を満たし、祖母に連れられて葛井寺の観音さんや道明寺の天神さんのお祭りに出かける楽しみがあった。

苦勞の仕方が違ってもどこの親も大変だったと思うが、私の場合は幼児期からひ弱だったので何倍か世話をかけた。その分恩返ししなければならなかったが、今思うと親不孝で過ごしてきた。終活の中で古い物を整理していたらこんな写真が出てきた。



まさに “東京だよ おっかさん・・・ここが二重橋・・・” だった。

26で東京へ長期出張したときに、母を招いて東京を案内した。もう一度は50を過ぎて京都観光に、南禅寺門前で一緒に湯豆腐を。リタイア後は時間があつたのでもっと親孝行できたのと思うが、後悔先に立たず。

長男だから兄弟をリードする立場で親孝行ができたのに、先祖の法要くらいしかできなかった。これから先何年生きてても叶わぬことである。終りに一言、妻が代わって陰ながら孝行してくれたことに感謝している。(終)

わが母の記

石原靖造

昭和9年、11、12、14、16年、これは母が私を筆頭に男ばかり5人産んだ年です。当時は兵隊さんが沢山生まれると持て囃されましたし、今の世なら少子化対策担当相から表彰状の一枚も出して貰うべき処と思います。

戦火が激しくなった昭和18年大阪の岸の里に居た我が家7人は、父の在所である愛知県の田舎へ疎開しました。その翌年不運にも、末弟が3歳で亡くなりま

したが、育ち盛りの4人を抱え、食料確保が大変だった様で、よく母に命じられ小川へ鮎や泥鰌を捕りに行ったり、セリやナズナを摘んで食の足しにして貰った事を覚えています。

父は身体が弱く兵役を免れましたが、終戦までは軍需工場で、戦後2年間は、大阪へ単身赴任していましたので、母の子育ては大変だったに違いありません。

昭和22年一家は再び大阪の文の里に舞戻りました。女学校時代 数学が好きだったと言う母は、よく父兄会に顔を出して呉れましたが、私の成績の悪さには何時も不機嫌でした。ミシンや編み物を得意とし、子供たちの衣服作製に多忙でしたが、何時からか、何がきっかけか記憶がありませんが、女だてらにキセルで刻みタバコをたしなんでいました。編み物の手を休め、美味しそうにキセルをくゆらせる姿は、今の世ではちょっと拝見出来ないものでありました。

苦勞して育てて呉れた兄弟4人はお陰様で今尚健在です。私もやっと母の最期の歳まで辿り着く事が出来ました。これを越えて行く事が苦勞を掛けた母への恩返しだと思っています。

令和3年4月23日

以 上

「わが母の記」

伊藤公博

母の愛情

私は高校3年の夏休みに最愛の母を亡くしました。享年47歳。母は3人兄弟で幼い時に両親を失い、親類の手で育てられました。が、いろいろと苦勞したこともあってか、「私が長生きをしなければね」とよく話してくれました。私は兄、姉、私、弟、妹、妹の6人兄弟で、母親の愛情を独占したい私が「一人っ子はいいな。僕なんか威張ろうと思うと兄ちゃんや姉ちゃんがいるし、甘えようと思

うとヤッチャン達がいるのだから」と言ったところ、「お母さんの愛情はオッパイと同じで飲んでも飲んでもなくならない。後から後から湧いてくる」と言われ納得したことを今でも忘れられません。 優しい母でした。

母は非国民

中国瀋陽市の冬は厳寒、スケートで遊べないときはよく友達を誘って家の中で遊びました。

皆内地の少国民に負けない愛国心の持ち主でした。今日も今日とて何人かの仲間がやってきました。意気軒高、大合唱です。(歌詞はうろ覚えのまま)

雨降りゃ嵐にならぬよう 風吹きゃさぞやご苦労と
空飛ぶ鳥の影にさえ 我子を偲ぶ親心
祈る心はただ一つ 晴れの手柄を勲を

その時丁度お茶を運んできた母親が涙声で言いました。「歌うのはやめて！内ではお兄ちゃんが予科練に行ってるの。気の優しいあの子に戦争で手柄なんて。」私の母は「軍国の母」ではない。私はすっかり意気消沈でしたが、母を憎む気にはなれませんでした。

兄は所属する中学校剣道部の決議に従い、親の反対を押しきって予科練に志願、入隊しておりました。私と違って人と争うことのない兄でした。1946年夏、神奈川県海老名市に瀋陽から引揚げてきた私たちを出迎えた元気な兄の姿を見たときの母の喜びはいかばかりであったか。今、小田急線厚木駅を通過するたびに亡き母の喜びを思います。

ソヴィエット将校に助けられた母

内地と違って私たち外地に住む者にとって8月15日は戦争の始まりでした。市街戦を恐れて瀋陽近郊の本溪湖に疎開したものの、疎開地到着のその日が8月15日、急遽出発点の瀋陽に逆戻りです。2日後父に連れられて本溪湖から瀋陽に向かいました。ところが瀋陽駅前広場でソヴィエト軍の歓迎に集まった群集に襲撃され、家族は父と姉／私／母と弟、二人の妹 の3つに分断されまし

た。荷物は奪われましたがそれぞれ無傷でした。私の場合、父を求めて駅からさほど遠くない自宅目指して走り、途中家族を探す父と出会いました。

母は末の妹を背負い、弟と妹の手を引いていたので身動きならぬ状態になりました。その時そばを通るソヴィエト軍の将校を見つけ、とっさに助けを求めました。暴徒の手から守ってくれるよう頼むだけでなく家までの道中を保護してくれるよう頼みこみ、家の近くで送ってもらったのだそうです。日ごろの物静かな母親の別の一面を見たおもしろいがありました。